

は せ どう かつ せん ず びょう ぶ 長谷堂合戦図屏風

今からおよそ400年ほど前、慶長5年（1600）の秋のことです。日本国中の大名が二つに分かれた、大きな戦いが起こりました。

大阪の豊臣家を守ろうとする西軍、江戸の徳川家康を中心とする東軍。天下分け目の戦いといわれた「関ヶ原の合戦」です。

豊臣五大老の一人上杉景勝^{かげかつ}の重臣、直江兼続^{なおえかねつぐ}は2万余りの軍勢をひきいて、徳川方の最上義光を討とうと山形めがけて攻め入ってきました。守る最上軍は多く見積もっても1万たらずという劣勢^{れっせい}でした。

直江軍は、まず白鷹山^{しらたか}の北の畑谷城^{はたや}をおそって、9月13日には、城主江口五兵衛光清^{えぐちごへえあききよ}以下三百数十名を全滅させました。つづいて、山形城の南西6キロメートルのところにある長谷堂城に押し寄せました。

城を守っていたのは志村伊豆守光安^{しむらいすのかみあきやす}を主将とする最上の武士たちです。

長谷堂城が落ちれば、山形も戦場になってしまいます。

義光はこの城を守るために全力をあげました。親せきにあたる仙台の伊達政宗^{だてまさむね}にも加勢をたのみました。

「たかが小さな山城一つぐらい」と、上杉軍は3回ほど総攻撃をかけてきましたが、城は落ちません。攻めたり、攻められたり、はげしい戦闘が約半月もつづきます。（屏風右側の場面）

そのうちに、関ヶ原の合戦で徳川方が勝ったという知らせがとどき、「戦いも、もはやこれまで」と、上杉軍は困みをといて退き、それを最上軍は追撃します。（屏風左側の場面）

この戦いを「長谷堂合戦」といっています。

この屏風は江戸時代中期（300年ほど前）に秋田の学者戸部一愨^{とべいっかんさいまさなお}斎正直が描いたものといわれています。

鉄棒を持って戦う最上義光（写真の右側）、鉄砲隊に守られた直江兼続（写真の左側）、そのころの両軍の有名な武将たちや、よろいを着ることもできない身分の低いさむらいたち……。

こまかく見ていくと、そのころの戦いの様子が、いろいろと想像できる屏風です。



最上義光と直江兼続が描かれた左隻部分